全戦争死没者追悼法要並びに原爆忌70周年法要・記念法話

仏教徒の平和の原点は同じ立場での同悲同感

７月４日、広島別院（広島市中区）で「全戦争死没者追悼法要並びに原爆忌70周年法要」が営まれた（記事は７月20日号掲載）。法要に先立ち、同区・浄宝寺の諏訪了我住職が記念布教で、仏さまの教えをいただく者として平和への思いを語った（写真）。今号ではその要約を掲載する。

浄宝寺住職　諏訪 了我さん

一人になるとは全く考えなかった

私が住職をさせていただいています浄宝寺は広島市中区大手町にありますが、原爆が投下されるまでは旧中島本町、今の平和記念公園の中にある原爆死没者慰霊碑から西に10㍍ほどのところにありました。そこはいわば爆心地で、戦後、都市計画で公園になったのです。浄宝寺は換地として現在の地に移りました。

今でこそ平和記念公園には人の住む家はありませんが、大正時代から昭和のごく初めまでは広島の繁華街で、多くの商店が並び、映画館や飲食店、旅館もありました。お寺も宗派はいろいろでしたが、10カ寺ありました。

太平洋戦争も敗色濃くなった昭和20年春、アメリカのB29の空襲を避けて田舎に疎開することになりました。私は中島国民学校の6年生、12歳になったばかりでした。中島国民学校からは約260人が広島県双三郡の三良坂町、吉舎町（現在の三次市）の7カ所の寺院、神社に分かれて疎開しました。私がお世話になった三良坂町の光善寺は日蓮宗でしたが、そこには中島学区の中でも最も爆心地に近い中島本町、材木町の児童がお世話になりました。

8月6日午前8時15分。広島に世界で初めての原子爆弾が投下されました。爆発1秒後には最大半径200㍍の火の玉となり、地上の爆心地では摂氏3000度から4000度の熱線、それに音速の2倍に相当する秒速700㍍の爆風、その上、強烈な放射線によって人も建物も破壊され、広島は焦土と化したのです。亡くなった多くは安芸門徒の方々でした。

私には両親と姉がいましたが、3人とも被爆死しました。それまで空襲で誰かどうかなるかわからないということは考えないことはなかったですが、私一人になるということは全く考えていなかった。遺体を見たわけではないし、信じる気にもなれない。しかし、〝それは気の毒だ〟と私の人生を代わってくれる人は誰もいません。いくら思いがけない人生であろうと、意に添わない人生であろうと、私の人生は私が生きていかなければならないのです。

『仏説無量寿経』に「人、世間愛欲のなかにありて、独り生れ独り死し、独り去り独り来る。行に当りて苦楽の地に至り趣く。身みづからこれを当くるに、代るものあることなし」（註釈版聖典56ページ）と説かれています。厳しいようですが、人生の代理人はないのです。

平和記念公園内にある原爆死没者慰霊碑。かつての浄宝寺はこのすぐ西側（左側）にあった

自己中心の考えと独善性が招く戦争

光善寺に疎開した児童の中で、家族がみんな死んで一人になったのは私だけではなく、ほかにも多くいました。そうでなくても、家族の誰かを亡くしていました。光善寺の門を出たところに石段がありますが、夕方になると子どもたちが集まり、そこに腰を下ろして広島の方を眺めながらシクシクシクシク泣く日が続きました。

そのうちに肉親、また親戚の人が順次迎えに来られる。私の場合は親戚が迎えにきてくれました。広島の駅に降り立ち、変わり果てた町の姿を見て、ぼう然としたのは原爆投下から1カ月と10日経った9月16日でした。

赤茶けた焼け野原の向こうに、広島湾に浮かぶ安芸の小富士の似島だけが昔と変わらない姿で、すぐ目の前に見えました。1発の爆弾でこんなになるのかと驚いたことです。電車道に沿って中島本町まで歩きましたが、全て焼き尽くされた寺の跡地に立って、これから一体どうなるのかと、虚ろな思いを持ってあたりを見回した時の感慨は、今も忘れることができません。あれから70年が経ちました。

戦争は武器を持った軍人だけが行い、軍人だけが影響を受けるというものではありません。一度戦争が始まると、年寄りも子どもも、男も女もみんな、その渦の中に巻き込まれてしまいます。そこに戦争の恐ろしさ、悲惨さ、やりきれなさがあります。人間はなぜ戦争をするのでしょうか。お互いに自らに問うてみなければなりません。

仏さまの教えを聞く身として、私自身思うことは、自分さえよければよいという自己中心の考え、また、自分は正しく、悪いのは相手であるという独善性、そうしたことが戦争を招くもとではないかということです。戦争を行うときは、相手が悪く、自分の方が正しいとお互いに主張します。日本もかつての戦争を「聖戦」といいました。

加害、被害に固執したならば…

平和への願いも、その起点が戦争の悲惨さ、恐ろしさ、恨みというところにとどまり、被害者とか加害者というところに固執しているならば、立場を異にした人間の自我の衝突は免れることはできないでしょう。

昭和57年3月6日、安芸門徒総結集大会の時に、原爆死没者慰霊碑の前で大谷光真ご門主（当時）が「平和を願う言葉」で次のように述べられました。

「私たちの姿をかえりみる時、『さるべき業縁のもよおさば、いかなるふるまいもすべし』という恐ろしさをそなえています。それが国家の危機、個人の危機に際して、どのような姿をとって現れたかは、先の大戦中に多くの人々が経験したところであります。私たち自身が傷つくとともに、他の多くの人びとを傷つけたその反省に立ってはじめて、平和への願いが力あるものとなるでしょう。

親鸞聖人は、そうした私たちのいつわりなき姿を罪悪深重の凡夫と受けとられ、そこに注がれる真実、無量寿・無量光の如来のまことを仰がれたのであります。そこにはすべてのいのちあるものが手をとり合い、信じ合える世界が開かれています」

如来さまのお心を聞かせていただくことを通して、我を是とし他を非とする独善性の恐ろしさに気付かせていただき、如来さまのお慈悲の中ですべての者が煩悩具足の凡夫として救われていかねばならぬいのちであるということに目を開かせていただき、同じ立場で同悲同感することこそ、平和の原点ではないでしょうか。